1-2714

81-5741

文學士給木暢韋著

易通大念佛宗畧史

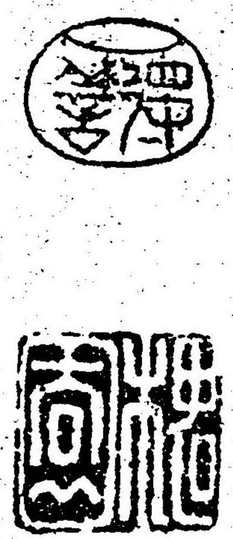
佛學院

包含衆德

天台眞

明治二十四年冬日

得美書老衲



凡例

一　本宗に關する著書、世上甚だ少し。これ本書の編述に困難を與へたる所なりし外、又本書の不完を致したる主要の源因あり。

二　本年正月四日、冬期の閑日を機として、予、大阪平野の本山に詣る。蓋し材料を蒐集せんが爲なり。されど去る年火を失して殿堂倉庫悉く烏有に歸し、材料また、災に逢ひて、今殆ど求むべからず。

三　管長予を介して宗の一寺を訪はしめらる。即ち大和生駒郡東安堵村大寶寺なり。貴住は西本良察氏、疾くより本宗の歴史を編せんの志を以つて、多く材料を蒐めありといふ。予の訪ふを迎へて極めて慇懃、予の目的に賛し、要とする材料を擧げて、悉く

之を余に貸與せらる。本書の不完、尚首尾を全うするを得しもの、大に氏の賜物によれるなり。特に記して以つて其の好意を謝す。

明治卅五年十月中旬

著者白す

融通大念佛宗略史

目次

一　緒言……（六）

本邦創立の宗派……平民的性質……純自力と純他力……一宗の發展……略史の領域

二　融通大念佛宗以前の本邦佛教……（七）

三論宗……成實宗……法相宗……倶舍宗……華嚴宗……律宗……奈良京と平安京……天台宗……眞言宗……事相教の隆盛……淨土思想

の發達……叡山の念佛門……

三　良忍上人の出家并に隱遁……（十五）

淨土思想の組織……良忍上人の誕生……幼時の登山……其の學習……出家……受戒……入室……講主……出離生死の痛嘆……隱遁の祈願……日課六萬遍……隱捿の理由……煩鎖の弊……貴族的の弊……現世的の弊……僧兵の暴行……

四　聲明業の中興……（二十三）

上人の精進……支那に於ける聲明業……本邦の始期……上人の造詣と位置……聲明業と本宗の開立……

五　融通大念佛宗の開立……（二十七）

上人半生の修行……三昧中の彌陀直授……本宗開立の天啓時……其の眞相……形式的念佛と內容的事々無礙圓融說との結合……念佛思想の發達と上人の新見地……本宗の安心……後世に於ける取捨……

六　良忍上人の布敎……（三十三）

彌陀直授後の閑居……悉達太子の消息……女房の歸依……毘沙門天の勸奬……融通念佛會の組成……上皇門院の入會……朝野の入會……上皇の宸翰……京洛以外の布敎……上人の本懷……

七　上人の入寂并に本宗の衰頽……（三十九）

上人の入寂……勅諡聖應大師……二世嚴賢上人……三世明應上人……四世觀西上人……五世尊永上人……六世良鎭上人……相承の中絕……衰頽の原因……敎權を規定しおかざりし事……學解の奬勵を要とせざりし事……淨土宗の勃興せし事……

八　法明上人の中興……（四十七）
十万上人の念佛會……法明上人の俗時……登野山……出家……敎行……八幡大菩薩の夢想……上人の奮起……其の事業……上人の入寂……上人以後の本宗……
九　中興以後の繼承……（五十三）
中興以後の畧譜……自八世興善上人至四十五世良觀上人……
十　大通上人の再興……（五十五）
四十六世大通上人の出興……上人出興の時代……漢學界……國學界……文藝界……宗敎界……上人の俗時……修學……參禪……出家……受戒……補佐……宗門紛爭の調停……高德の歷訪……幕府への請願……觀師の遷化……上人の晋山……宗門眞俗の興隆……一山要具の完備……近畿の布敎……賜紫衣……擅林勅許……太上皇の親序……上人の功蹟……
十一　上人の著作幷に入寂……（六十一）
啓蒙時代……上人の態度……融通圓門章の撰述……其の判敎……融通念佛信解章の撰述……上人の敎化及び事業……上人の入寂……
十二　敎相註釋の時代……（六十七）
門下俊才の輩出……四十七世忍通上人……大源雜錄の編纂……四十八世信海僧正……圓門章私記……圓門章集註……口稱觀念の抗論……扶敎論と通妨抄……本母集……本緣起網要抄……本宗に關する述作目錄……
十三　繼續時代……（七十五）

宗勢の平板……華嚴以下の癈宗……本宗の獨立……本山の回祿……
當代管長の晉山……前途の大難事……
十四　結論……（七十九）
宗教の非運……レチースサンス時代……世界史の眞相……文藝復興
期と方今……神話と宗教……箇人主義……大勢の極端……極端の反
動……宗教の將來……

融通大念佛宗略史

文學士　鈴木暢幸著

一　緒言

六宗、八宗、或は十二十三宗、佛教の各派、其の數何ぞ限らんや。而して、特に、筆を融通念佛宗に染ひる、けだし、一二の理由とする所なきにあらず。

平安朝の後期、本宗の、いまだ開立を見るに至らざりし以前、我が國、已に、多くの宗派を有したりき。曰く倶舍、曰く三論、曰く法相、曰く華嚴等。されど、

此等は、全く漢土傳來の宗義なりき。天台は、傳敎大師の包含主義により、密禪戒の三宗を合せて、支那天台以外に一新宗を開き、弘法大師は、十住心の判敎によつて、支那密敎以上に、優秀なる宗旨を宣布したれども、此等、亦、實は、其の体制を、支那の成宗に採り、僅に、その一部をかへたるに過ぎず。然るに、獨、本宗は、聖應大師が、三昧中に感得し給へる、彌陀の直授によるとするものなるが故に、前數者の支那的なるに反して、これは純然たる我が國創設の宗派なりといふを得べし。固より、此の後、其の跡を追ひて、我が國風の宗派の、起るもの多々ありしには相違なきも、兎に角に、我が一國の範圍に於いて立敎したる宗派は、本宗を以て最古のものとなさいるべからず。これ、吾人の、特に、此の宗を顧みたる所以の第一なり。

本宗以前に於ける、我が國宗敎界の狀態を察するに、三論、華嚴、律等の所謂八宗は、皆高尙の哲理を說き、至難の敎義を叙するを旨とし、而して其の哲理敎義は、一般下層の無學輩の、容易に解し得る所に非ざりしに似たり。謂ふに、漸く社會の轉變に自己を意識せる當時以後の民間に、信仰を渴望し、安心の方法を要求するの急なるは、尙、多少、吾人の現時に於けるが如きものありしなるべし。本宗は即ち此の要求を充たさんが爲に勃興し、平民的性質に於いて、彼等に安慰を與へんと欲したるものなりしなり。これ、特に、吾人の、此の宗を顧みたる所以の第二なり。

他力本願の淨土敎が、法然上人によりて確立さるゝ以前にありて、自ら他力と唱へつゝ、尙、自力往生の作行を否定せざる本宗の所說は、敎義の史的發達に於ける、純自力と純他力との仲間過渡の狀態に存するものにして、我が日本佛敎史の研究中、興味少なからざる題目の一個といはざるべからず。これ、吾人の、特に此の宗を顧みたる所以の第三なり。

一度は宮廷にも勸進して、歸依を賜はる事淺からざりし本宗も、開祖以後、宗勢

次第に衰へ、法明大通等、多少の波瀾はなきに非ざりきと雖も、要するに、元亨釋書の著者によりて、天台の一派と判せられ、凝然大德によりては、全然顧みられざりしが如きの運命を有し、且つ、明治維新の後、しばらく他宗に附屬し、其の後、三百余の末寺を率ゐて、一宗の獨立を成就せしも、去る三十一年五月、火を失して、本堂以下六十七棟を燒失し、爾後數年、僅に倉庫の一隅に籠りて余勢を保ち、今や一本堂の再建さへ、尙成るを告げざるの有樣に存す。過去八百年の長歷史を有する佛敎一宗の末路として見ば、あに、悲劇の甚しきものに非ずとせんや。世多く此の宗の存在だに知らず。知つて而して一片衷心の同情を催すもの更に甚少し。過去の歷史、それ、果して無意義か、此の宗の前途、それ、果して望なきか。これ、吾人の、特に、此の宗を顧みたる所以の第四あり。

予が、本宗の概容を伺はんとせる理由の一二は、はゞ以上の如し。然も、淺薄なる敎會的略史の一部に止りて、深く敎理の如何に論じ及ばざりし所以のものは、そが秘說を談じ、敎相を判ずるが如き專門の事業の、實に、予に、ふさはしからざるを自信すればなり。希くは之を諒せよ。

二　本宗以前の本邦佛敎

吾人は、本宗の眞狀を說くの順序として、まづ、本宗以前に於ける、本邦佛敎の概況を見、併せて、少しく、淨土思想發達の由來を物語らざるべからず。

欽明天皇の朝前後に輸入せし佛敎は、果して、何れの宗派に屬するものなりしかは、今より之を推知するに難し。推古天皇の朝に、高麗の僧慧觀僧正、始めて、命によりて、三論を宮中に進講すと云ふ。これ、蓋し、成立宗として、佛敎の我が國に弘通せられたる最初のものなるべし。三論と共に、空宗に屬すべき成實

宗は、其の後、之に伴ひて我に入りぬ。されど、その研究は、全く、三論門派の一附宗たるに過ぎざるの有樣ありき。

佛教の興隆を以つて、半生の事業とし給へる聖德太子の、一度、學問僧を支那に送りて、遠く佛教を將來せしめ給ふや、其の後、陸續として彼の土に渡り、教義を齎して、之を我に弘通するもの多く出で、以上の空宗に屬するもの丶外、齊明天皇の朝に、道昭、始めて法相宗を傳へ、合せて俱舍宗をも弘めたり。蓋し、法相俱舍は、其の教義、共に有宗に屬するものにして、道昭渡唐の時、恰も玄奘三藏が、新に支那に開宗せる所たりしなり。道昭は、實に、其の直門に教を乞へりといふ。

元正天皇の朝、都を奈良に遷し給へる頃は、三論、法相、共に盛に行はれ、就中三論の道慈、智光、禮光、法相の智鳳、義淵、行基、玄昉、良辨等は、其の最たるものなりしが如し。

聖武天皇の朝に及び、法相の良辨、新羅の僧審祥を請じて、華嚴を金鐘寺に開講す。これ、本邦華嚴宗あるの始となす。其の道場は即ち今の東大寺の前身なり。

更に下りて、孝謙天皇の朝に、唐の僧鑑眞、請によりて遠く我が國に來り、四分の戒律を戒壇院に弘む。後、自ら、唐招提寺に居る。之を本邦律宗の開基となす。

以上を總稱して古京の六宗といふ。謂ふに、一度は蕃神として齒せられざりし程の佛教にして、僅々百年ならざるに、此の隆盛を見るに至りしものは、元より、偉人上宮太子の、推奬扶掖、其の宜しきを得たりしによるべしと雖も、亦、代々の天皇、深く之を信奉し給へるに加へて、文藝の模範者たる唐國の、方に佛教の勢力偉大なると、文化が既にわが國民精神をして、哲學的宗教的の考察に向はしめしとによらすんばあらず。

歴代の信奉をつゐぎ來りし佛教は、其の後、六宗の間、相互に消長する所ありしと雖も、之を通觀するに、平安遷都の後に至りても、其の勢力を退轉せず、東寺

西寺を以つて、國家鎮護の伽藍となし、天皇、親ら詔して、其の興廢を國家と共にせん事を誓ひ給へり。方今、吾人の現狀に比して、果して如何の感あるべきぞや。一世の機運、此の如きの時に當り、大安寺の學徒に最澄あり。鑑眞和上の將來せる、天台の教籍を紐ときて、大に悟る所あり。法華圓宗の妙理を探りて、研讃を怠らず、自ら比叡山に上りて延暦寺を建て、名聲四方を壓す。後、入唐して專ら天台の教を傳へ、傍ら、密禪戒をも合せ學び、歸朝の後、之を叡山に弘通す。これ、我が國、天台宗あるの始なり。

最澄の入唐と時を同じうして、三論の學徒空海も、亦唐に赴き、密法を學びて歸朝し、始、高雄山寺に住し、後、高野山に入る。其の弘通せる所は、即ち眞言宗なり。之より、密教の勢次第に盛となり、遂に叡山南都をして、尙、其の所說にさへ影響を與へ、平安朝三百余年を通じて、殆ど一般佛教の傾向を支配したるが如きの感あらしめたり。蓋し、事相教の神秘的所說は、未開人士の好尙を、誘導し易き性質あるものなれば、由來、科學的智力に欠如たる本邦人士の思想には、是等の修法秘說が、最も取り入れらるゝに適したるものなりしなるべし。況んや、比較的に、理性人士たる支那の當時にして、尙、隆盛なる狀況を呈したりしに於いてをや。

以上八宗の興廢は、我が上人の以前に於ける、佛教界の狀態ありき。而して、此の間、彌陀佛淨土往生の思想は、表に、裡に、是等自力の宗派のうちにも行はれ、其の教義は、已に、古印度より、大乘教に附隨して修せられ來りしものゝ如し。例へば、馬鳴堅惠これが前驅をなして、龍樹天親之につぎ、支那に入りては、晉代道安、慧遠以後、諸哲相率ゐて淨業を修し、わが上代にありても、無量壽經を宮講せる慧隱、衆庶を勸誘せる行基、淨土論註の著者智光等あり。此等は、其の最も注意を要すべきものならん。されど、當時の所謂念佛は、純他力の口稱に非ずして、寧ろ、自力の觀念なりき。往生を願求するもの、大菩提心を起して、精

進に修行し、其の功德を淨土に廻向するに、觀念、稱名、讀經、禮佛等の行あり と雖も、之を廻向して、往生の因とするに、就中、觀念最も勝れたりとなすものにして、これ、全く、聖道門の見解たるを免れず。畢竟、自力の諸宗を表として念佛之に附帶せるものに過ぎざりしなり。

それ此の如し、されど、自力口稱の念佛は、以後、愈々增加し來れる、淨敎兼修者のうちに生ずるに至りたり。平安朝の中期、歡喜踊躍の文によりて、後世の所謂空也念佛の基を開きたる空也上人、往生要集を著して、遙に善導の流をくめる横川の源信僧都の如きは、すなはち、これが最たるものとなすべきか。往生講式の著者永觀律師、決定往生集の著者鎭海己講の如き、亦之につげるものなり。

これより先、傳敎大師、智者大師の止觀に示せる處を以つて、四種三昧を叡山に立す。常行三昧は、すなはち其の一にあり。慈覺大師之をつぎ、入唐歸朝の後、新に常行三昧堂を山上に建立し、五台山念佛三昧の法をうつして之を修す。大師の入寂するや。特に命を遺して、不斷念佛を修せしむ。されば、自力定心の唱名念佛なりとは雖も、叡山念佛門の形式は、傳敎大師の四種三昧を濫觴とし、慈覺大師以後、漸次に發達したるものといふも、不可なかるべし。彼の空也上人、源信僧都、實は此等の勢力の間に起りたるものなりしなり。

三　良忍上人の出家幷に隱遁

平安朝佛法の隆盛に加へて、淨土思想の發達し來れることは、はゝ前に述べたる所の如し。されど、其の思想は、未だ完全なる組織を得ず、教義の判定、また見るを得るものはあらざりき。吾人が今、わが英雄、良忍上人の融通大念佛宗を說くもの、茲に至つて始めて其の意義明なるべきなり。

良忍上人、俗姓は秦氏、尾張國知多郡富田の庄の人、藤原道武氏の子なり。母は熱田の社頭大宮司の息女、後三條天皇の延文四年に生る。十二才の春、父母を辭

して、ひとり叡山に上り、都率谷檀那院の良賀僧都につきて、專ら淨行の朝暮を送りぬ。

僧都、之に經史を授け典籍を誦せしむるに、其の明敏、遙に衆に超え、通曉實に驚くべきものありしかば、僧都、大に望を囑し、敎練熏陶かつて怠ることなく、遂に度牒を賜はりて出家せしめ、名を光乘坊良忍と稱せしむ。上人、これより、夙に起き夜はにいね、螢雪の功を積み、天台一家の敎觀を習學する事茲に十許の年を閱せしかば、其の學ます〳〵進み、其の識愈々廣く、今や一山其の右に出づるものなきの勢をなせり。

其の間、十五歳の時、師命により、園城寺の大德禪仁律師に從つて、梵網輕重の戒法を受得し、廿一才にして、仁和寺の永意阿闍梨に入室し、両部灌頂を承禀せしが、これより先、上人、常行堂の衆に加はりて講主の職を勤め、三千の大衆を率ゐて、之を敎導するの重任を負ひたりき。

されど、當時、比叡一山の風、其の日夜に唯學解にのみいそがはしく、徒に圓成の空理を談ずるのみにして、出離生死の一大事を忽にし、累卵の岸上にゆるがんとするの危きを救濟して、自他の安立を定めんとするに迂なるものありしかば、上人深く之を嘆じ、そゞろに隱遁の志を起して、私に東塔西谷無動寺の不動尊に參詣し、山門の規縛を脱して、徐に其の本意を遂げんことを祈願せり。

二十三才、遂に意を決して講主の職を辞し、大原の別所に隱棲するを得しかば、之より日課六万遍を唱へて、勇猛精進、偏に出離の大道に赴かんことにつとめたり。其の居は今の來迎院の地即ち是なり。

けだし、上人が、講職を辞して、ひとり大原の幽居に隱棲せし所以は、一は、當時叡山佛敎の、徒に深遠高旨の哲理にのみはせ、其の左右を論ずるの鎖事にのみいそがはしく、之を實際にして、自他の一大事緣に、想ひ至らざるの風あるを恐れしにはよるべきも、主要の動機として、尙他に一二の關係を有せるものなしとせず。

之を史に徴するに、當時は、奈良朝及び平安朝初期の大勢を受けて、佛法崇尊の風、ます〳〵盛にして、其の勢、眞に、當るべからざるが如きの狀を呈せりきと雖も、其の盛行とは、實は、徒に、貴族的範圍の現世的信奉に止りて、例へば密教の盛行に伴ひてしきりなる、南都北京の兩三大會を始とし、宮中御齋會、眞言院の御修法、大元帥法、仁王會、灌佛會、佛名會、或は法華八講、十講、二十講の如き、悉く、天下或は箇人の爲に、朝廷幷に貴人の間に專行せらるゝものにあらざるなく、位官押すべく、紫緋きらびやかなる門跡の續出、或は、法勝寺尊勝寺圓勝寺等の建立の如き、皆、これ、榮華より生ぜる現世的祈願、或は、人一と時の安慰に過ぎずして、人生赤裸々の巷に彷徨する民庶の苦悶には、殆ど爲すあきの有樣たりしに似たり。釋尊が、四姓を同恤して、慈眼を首陀の布敎にめぐらし給ひし動機、或は、以つてこの際に於ける上人の心裡に、比すべきもの全くなしとなすべけんや。之に加ふるに、朝家の歸依あつきの致す所か、僧侶の弊實一時眞に甚しきに至り、さきには、政敎の一致に基して、思はざる醜風を禁裡に催し、後には、事相の弊習に陷りて、俗僧は、徒に、虛位空官に現世をはこり、爵祿をむさぼり、愛着の巷にさまよひて、全く世間の陋と相擇ばざるの姿となり下れり。これ、豈に、道心ある上人のいさぎよしとせる所ならんや。況んや、當代貴族的宮佛法の他面に、山佛法は雜兵的暴勢を形づくり、圓頂たちまち阿修羅の鬼趣に變じ、拆伏の器は、遂に、自門の私慾を恣にするの要に供せらるゝ事となりしに於いてをや。

國史眼の一節に曰く

諸大寺の僧兵强暴增長し、叡山最も甚だし、圓城寺、後三條帝に迫り、戒壇を建てんとす、延曆寺之を拒み、確執益々甚だしく、白河帝の初年に、園城寺を燒く、又祇園別當を訴へて、數千人京師に亂入す、撿非違使拒ぎ退く、園城寺また戒壇を迫り請ひ、兩寺相攻む、朝廷震怖し、武士を命じて禁內を衛り、源義家を遣つて園城寺の暴徒を捕ふ、延曆寺因つて嚮に燒殘せる堂宇を焚き拂ふ

帝怖ゝる甚だし、是より義家義綱兄弟を從へて常に警戒し、院宮に北面藏人を置く、堀河の朝に義綱叡山の僧都を殺す、僧徒怒り日吉の神輿を振つて闕に追る、源の頼治拒き退く、僧徒神輿を中堂に奉じて國家を呪詛す、朝廷遂に頼治を流し諭釋す、法皇嘗て曰く、天下に意の如くならぬものは、鴨河の水、雙六の采、山法師なりと、山法師は叡山僧徒なり、

と、あはれ法を以つて國家の擁護たるべしと稱せる三界の大導師は、今や劔戟を振つて、民衆の安全を脅すに至りぬ。此の間、山法師の大數に、慈眼視衆生の大悲あらんや、何ぞ人生の一大事緣の哀觀に想當せるものあらんや。身は精舍に佛神を禮すと稱すと雖も、心は誹謗猜怨の惡鬼となれる墮衆、上人の其の伍を異にして、ひとり不訪の隱趣につかんと欲し、遂に意を決して大原の幽閑に隱退せられしもの、全く此の時にありたるなり。上人の心事推知するに明なるものあらざるか。

想ふに、之を畿にしては、惠心の喧を避けて横川に往生極樂院を創せる、之を後にしては、源空の黒谷を出で、榮西の東塔を下り、親鸞の無動寺を去り、而して日蓮の三塔の學匠に別れし如きも、或は、多少上人と相似の動機を有する所ありしによるならんか。

四　聲明業の中興

かくて上人は、之より日夜に諸の行法を修し、正行の余暇に大藏經典を繙き、勇猛精進、嘗て怠るなき事二十余年、其の間、秘說の傳へらるゝもの多々わりと雖も、就中、眞に、上人一代の事業として、本宗開立につぐとすべきものを、聲明業中興の事となす。

聲明は、もと、印度五明の一にして、ふるくより漢地に傳はりしに、關內關外吳蜀の唄詞多種にして、各々、その好む所に隨ひ、かつ、漢梵已に音韻を殊にせる

を以つて、長く互用すること能はざりしが、宋の時に及びて、康僧會法師あり。博學辨才にして、經典を譯出せる外、又、梵音をよくし、唄詞を傳へぬ。音製哀雅、美を世に擅にし、音聲の學、咸く取りて則とせりといふ。又、晉の時に、道安法師あり。上經上講布薩の三科を集製して、之を世に傳ふ。魏の時に至りて、陳思王曹植あり。字は子建、魏の武帝の第四子なり。幼より敏にして、凡ての術藝に通ぜずといふことなく、又、贊唄の極に達せりと稱せらる。法苑珠林讃嘆の一節に曰く

植每レ讀二佛經一。輒流連嗟翫。以爲二至道之宗極一也。遂製二轉讃七世昇降之響一。世人諷誦咸憲章焉。嘗遊二魚山一。忽聞二空中梵天之響一。淸雅哀婉其聲動レ心。獨聽良久。而侍御皆聞。植深感二神理一。彌悟二法應一。乃摹二其聲節一。寫爲二梵唄一。纂レ文製レ音。傳爲二後式一。

と、梵聲これより大に世に行はる。我が朝に入りては、延曆二年、已に梵唄を正しうするの詔ありたれば、其の行はれしは、更に其の以前よりならざるべからず。承和の初、空海奏して、聲明の度を置き、其の後、實朝は密唄を善くせりと傳へらる。慈覺大師の渡唐するや、諸師の間を旋りて、旁に此の業を傳へ、以つて我が國に齎しぬ。之より九傳して上人に至る。上人は即ち多武峰賴澄阿闍梨に稟受せるなり。又先覺諸師の音訣をも總括傳持せり。元亨釋書、之を叙して曰く

自レ居二大原山一。盛唱二此業一。以爲二法事之莊儀一。忍博索二支派一統二干己一。其受二尋宴者五世一。受二膽西一者四世。顯密聲明諸師音訣。皆能括囊。(中略)因レ是大原之地。成二梵唄之場一。方今天下言二聲明一者。皆祖二干忍一焉。

と、以つて、上人の斯道に於ける造詣と位置とを知るべきなり。凝然大德の聲明源流記にも、大に上人の梵音を讃して

寔是聲明祖師。音曲宗匠。後代聲哲。無及由而已。

と記さる。此等の技能、もとより、眞率なる宗教眼より見ば、誠に細事、觀るに

足らざるものゝ如くなりと雖も、されど、其の技、ほとんど、神に入れる上人の梵音は、やがて、念佛宗の開立に、多大の貢献をなすなかりしとは斷ずべけんや。一度引きなす清婉の雅音に、諸天は感動し、龍鬼は悲泣し、ふたゝび澄み上る呂律のしらべに、飛鳥翼をやすめ、沈魚浮び出づと稱す。妙技の極致に至つては、眞に、凡慮の企て及ばざる所ありて存するなり。聲明の業、何ぞ侮るべきものならんや。況んや、此等の事業が、向後、念佛宗の弘通に、偉大なる勢力を與へ、かつ、該宗の運命にさへ立ち入りて、興廢を共にしたりし事實あるに於いてをや。

五　融通大念佛宗の開立

聲明業の中興ともたゝえられし上人は、經典に智眼を朗にし、勤行に常坐不臥の精進を重ぬること、己に半生になんゝとす。今や其の功德、茲に感應おくんばある可からず。傳にいふ、上人、年、方に四十六、鳥羽天皇の永久五年丁酉五月十五日の午刻、勤行莊嚴にして三昧に入れるの時、

阿彌陀佛色相を現じ、示誨してのたまはく、汝が行不可思議あり、一閻浮のうち、日域の間、一人なりとす、是誠に無双あるべし、然れども、汝順次の往生

得がたきなり、其の故は、我が土は一向清淨のさかひ、大乘善根の國なり、小善根福德の因緣を以つては生じ難し、汝が行業の如きにては、たとひ多生廣劫をふとも、順次往生の業因に備へ難し、速疾往生の勝因を敎へんとおもふ、いはゆる融通念佛是なり、融通念佛は、一人の行を以つて衆人の行とし、衆人の行をもつて一人の行とするが故に、功德も廣大なり、往生も順次なるべし、一人往生を遂げば、衆人も往生を遂げんこと疑あるべからず、云々（融通大念佛本緣起文）

是を他力の往生と名づくるなりと。すなはち、偈を說いて曰く、十界一念、融通念佛、億百万遍、功德圓滿と。されど其の阿彌陀如來の色相が、果して、如何に、上人の三昧中に現れ給ひしかは、しばらく斷ずべからざる所にありと雖も、少くとも、此の瞬時は、經行多年、尙、生死を出離する能はざりし良忍上人が、俄然として心機茲に轉じ、赫耀たる光明にてらされて、超脫の坦道を發見するに至り而して、本邦固有の融通大念佛宗が、茲に始めて唱道せらるべき地盤を固めたる、天啓時と見るべきものなり。

更にくはしく言へば、上人の茲に至れる二十余年間、慧眼は一代如來藏經にさられて、法華々嚴の敎理に飽くと雖も、そは、むしろ、智的要求より出發せる學解的理論的方面にして、人生の直接問題と關係する所余りに密ならず、之に反して、上人が、實際的方面として取れる常行三昧の念佛門は、諸種の異說によつて、其の根底薄弱なる、傳承的、或は、注入的の信解にして、多くの場合に於いて、獨創を意味する信念の確立には、未だ、何等の基礎をも定むること能はざりしなり。これ、上人の如き、已に、豐富なる學解的蘊蓄を有する哲學者の上には、到底、安慰を與へ得るの方法に非ざりしは、明なる所なり。一度は、社會の非勢を慨して、奮然、大原の別居に隱れたりし上人の、爾來半生の間、尙安慰を證し得るに至らざりし心內の煩悶や、果して如何なりしならんぞや。今や俄にし

て是等の形式的念佛が、華嚴法華の事々無礙圓融說と結合し、從來一箇念佛の左右に付いてのみ論ぜられし濟躍の中に、上人、ひとり超然として、一念即多念の新見を覺り、其の結合關係に、動かすべからざる學理的解說を立し得るに至りしものは、即ち、多年の行德に加ふるに、學理的蘊蓄を有せる上人の、綜合的天才によるものにして、そが不可思議なる心理作用は、上人自らも、遂に、意識する所にあらざりしあるべければ、今迄は、蟠りし心內の煩悶が、頓に浮雲と消え去りし光景を、當時以後に勢力をなし居たりし、事相的解說に依れりとせば、之をしも、三昧中、彌陀如來直授の威力となさんことも、決していはれなき事とは評し難きなり。

蓋し、信念の動機は、眞に彈倪するに由あきものにして、論評し來つて、殆ど理を見出し難きはとりにも、一髮のゆらぐ所、忽然、湧出する不可思議のものなれば、決して、珍とするに足らざる念佛と、更に、異とするに及ばざる融通の理とを双手にして、端あくも、此等を一束に合せ得たる上人の心裡には、油然として、さる道念の起り來るに至りしもの、毫もあやしむに足らざるなり。これ、上人が、始めて、自己に宗敎を獲得せりと言ふべきもの、やがて弘通せらるべき融通大念佛宗は、すなはち是より現れなんとす。

されど、上人のこの新見地を以つて、當代に於ける念佛思想發達に、竪に、一段の進步を與へたるものとは解すべからず。何となれば、上人の獨創として尊ぶべき所点は、念佛の包含する內容の新解にはあらずして、むしろ、當代に於いて、最も發達したる念佛の觀念（アイデア）と、大乘佛敎の圓理とを取つて、之を、橫に、結合したりといふ邊に存し、觀念、はた、口稱の如何については、何等の自說をも主張せらるゝ所あらざりしを以つてなり。例へば、後世の純他力敎が、彌陀の願行を唯一の安心對境となし、口稱は之に伴ふもののみなるに反し、之は、自己の日課が大に融通して、往生の正因たることを信じ、自ら起行を誓ふに、安心をかくるに

ても知るべく、本宗の後代に於いて、念佛義に、口稱と觀念との爭を生じ、或は現時に於いても、時に、良忍、大通の異見を談せんとするものあるにても證するに足るべし。もし。それ、上人當時の淨敎思想は、果して如何なる發達狀態にありたりしか、將た、上人の採用せられたる念佛の內容は、如何なる意義を有したりしかの問題に至りては、予は、むしろ、不言に委し置かんと欲するのみ。これ、實は、學者の眞率なる研究に對して、その神聖を傷つけざらんことを期するにより てあり。唯、本宗が、爾來、他宗に對する必要より、一盛一衰の間、漸次、其の敎義形体の上に、取捨變更を敢てしたるの事實あらんかは、豫め注意しおかざるべからざる所あるべし。

六　上人の布敎

事々無礙の哲理によりて、相互念佛の間に、融通說を確立したる上人は、自已の立脚地已に定りぬと雖も、機緣いまだ熟せざるものありしによるか、尙、草庵に閑居して、しばらく、世人勸化の法に出づるに及ばざりき。

昔、悉達太子、尼連禪河に身を淸めて苦行林に入り、菩提樹下に端坐して、われもし正覺を成せずんば、この坐を去らじと誓ふ。夜氣爽にして四邊悉く閒、天將に明けなんとして樹葉尙靜なるの時、忽然として明鏡かがやき亘り、究竟智を得

て遂に菩提を証す。太子の、はじめ、道に志し、思をひそむるや、もと人生憂苦の救済にありしに、今やすでにはち、其の域に達して、志せる我、已に失せ去り、世上、亦、救ふべきの衆生もあることなし。太子、是に於いて、自ら足れりとおし、ひとり這中に殘りて又説くを須ゐざらんとせり。或は曰く、太子、尙、個中の快味を試みんが爲に、一七日、乃至三七日の間、定を出づるを敢てせざりきと。

吾人は、良忍上人の傾解、果して太子の消息に比すべきものなりや否やを斷せずと雖も、日を久うして、深くみづから守る所ありしは事實に屬す。されど、妙華の薫發する所、靈香豈遂に空しからんや。此の間に於ける上人の德化は、求めざるに桃季の道をなし、上人を敬して敎を仰ぎ、化をうくるもの少からず。待賢門院の命婦尾張、和泉前司道經の女の、薙髮して妙法及び如々と稱せる如きは、その最たるものなりしなり。

是よりさき、上人の雙親、上人の德化によりて、入道染衣の勝緣を結べりと稱せらる。されど、予、其の消息文に關して、いまだ、明にするを得ざるものあるを以つて、しばらく茲に付記するに止めおく。

其の後、傳に曰く、

或時鞍馬寺の毘沙門天王、威容を現じて大師に告げて曰く、師先に佛の示現を蒙ひりて融通念佛の直授を受けたり、なんぞ流化勸進して苦海の群生を救濟し玉はざるやと、是に於いて、大師時至り、機熟するを知しめし云々（三祖畧傳）

是等の傳説は、いまだ、常識のよく解し得る所に非ざれば、今、其の眞僞をば論せざれども、此の時に至りて、兎に角に、上人の退守的態度に、何等かの刺激の加はるありて、勸化弘法の動機たる事ありしことは疑なき事實あるべし。

是に於いて、上人、元治元年六月九日、始めて名帳を製して徐に草庵を出で、融通念佛會なるものを組みて、まづ鳥羽上皇、及び、待賢門院に謁し、盡未來際、日課百遍をうけ給ふべきの宣旨をうけ、是より四方に勸進して、此の念佛會に入會

せしめ、日課唱名を誓ひて、自他の願行成就を信せしめ、以つて社會の危急を救はん事につとめたり。從來形式的儀容をのみ見たりし舊佛教の保護者、及び、はとんど關係せられざりし下層一般の民庶の爲、淨界の門茲に開かれぬ。貴賤何ぞそが救濟を求めざるものあるべきや。是に於いて、その簡簿につきて融通念佛會に入り、上人歸依の信者となりしもの、上は上皇公卿諸司女官をはじめ、下は匹夫匹婦の老少に至るまで、其の數、實に、枚舉に遑あらざるに至れり。

鳥羽上皇、其の後、歸依ます〳〵深く、朝暮に手慣れ給ひし尺二の御鏡を取つて、之を扣鏡に鑄しめ、みづから上人に賜ひて、勸化弘通の擊節となさしめ玉ふ。上皇、また、みづから、融通念佛勸進帳を製し、之に宸翰して上人に賜ふ。其の主文に曰く。

敬白　貴賤男女をすゝめて此の念佛の名帳に入奉りてともに彼國に往生せしめんと請勸進帳

南無陀彌陀佛

と、而して日課の數を增して千遍とおし、諸山の僧綱にもすゝめて、衆に加はらしめ給へり。上、已に此の如し、下、何ぞならふ事なくして可ならんや。諸天冥衆の幽贊をさへ得たりと傳ふるもの、豈、一端を推せしむるの料たる事なしとせんや。

上人、是より、四方の勸進を以つて已が任となし、京を後にして、南、浪華に出で、まづ四天王寺に、初化の跡を遺し、修樂寺に、長く一宗本山の基礎を止め、更に南して、磯長の廟に詣で、轉じて南和に向ひ、三輪、布留をへて、芳山に入り、是より、東して、南、勢にめぐり、松坂(來迎寺)、山田(新善光寺)等に、念佛の跡を止めたり。其の他念佛の法系を傳ふるもの、華嚴寺、極樂寺、善光寺等に及ぶ。其の範圍甚だ大なりといふを得ずと雖も。念佛聲明の會式、今に存するものは、全く上人の勢力感化にならずんばあらずとす。亦偉とおすに足らざらんや。

わゝ、自力聖道の途に頼むべからざるを覺り、精神的平民主義の方便によれる、上人の善巧方便は、これ、わが一般國民が、始めて自己に同情を有する、固有の宗教を得たりといふべきものにして、もし、其の法を得ば、布教の前途、多望なるものなりしや知るべきなり。

されど、上人の本懐は、深遠なる學理の後盾を有しつゝ、尚、括屈なる形式と、專門的難解とを全く捨て、ひたすら不安迷路の衆生を救濟するを以つて、唯一の急務となしたりしが故に、管箒をかゝげて念佛會に入會せしめ、日課の唱名を進めて、安心起行せしむるにいそがはしく、殊更に、理解を表示し、教判をたて、他宗に對して、嚣々の著作を物する等のことあらざりき。これ、一は、極めて平易を旨とし、俗間に歡迎せられて、一時洛の内外を動かしたる原因たるに相違なかりきといへども、亦、夙に、そが宗制教相を確立しおかざりし事が、後來本宗の運命に關して、少からざる不利なりしことも疑なき所なり。

七　上人の入滅并に本宗の衰頽

かくて、良忍上人は、長承元年二月朔日、春秋六十一にして、大原の來迎院に入寂せらる。遺骸は院の背後に茶毘し、靈廟を玆に設く。高さ二丈余、七級の石浮圖なり。上人入滅より六百四十余年をへて、後桃園天皇の朝に及び、安永二年癸巳十月六日、勅諡して號を聖應大師と賜ふ。其の勅書に曰く

勅良忍上人者以二利益衆生一爲二己任一以二正法久住一爲二我願一一世歸二干道化一皆蒙二融通之得益一万民服二干德行一誠彰二無尋之感應一是以衆罪之霜露懸二佛日一忽消

業障之江海逢二船師一自渡實無明暗夜之大明燈賢刧千佛之一化身也苟慕二其名德一宜二崇飾一因諡曰二聖應大師一

安永二年十月六日

一篇の諡號、上人の輕重に何するものにあらずといへども、以つて、救濟の導師を敬し給ふ、聖慮の畏きを見るに足るものなからずや。

吾人は、今、筆を進めて、上人入寂後の本宗を叙せざるべからず。上人が、融通大念佛宗を開立せられしより此の方、其の慈に趣き、其の德を慕ふもの、近畿上下其の數を知らず。親度の徒衆、亦甚だ多かりしが、就中、瀉瓶の上足として一代に推されたるもの二人あり。曰く嚴賢、曰く明應これなり。先師入寂の後、其の戒臘老少の倫序に從つて、師の法統をつぎぬ。淨土宗の開祖法然上人の師、叡空も亦、上人在山の時の一門下なりき。

二世良惠嚴賢上人　山城國大原の人、常に良忍上人に從つて其の化を輔けぬ。日課四万三千遍の行者なりき。或はいふ、融通和讃を著せりと。久安四年四月二日、六十五才にして入寂せり。

三世良感明應上人　山城國醍醐の人なり。嚴賢上人についで、一宗の歸趣たりしが、其の壽長からず。永曆元年三月四日、四十三才にして入寂せり。

四世良信觀西上人　山和國下市の人、明應上人法脈相承の弟子なり。承安元年七月朔日、五十三才にして入寂せり。

五世隆阿尊永上人　山城國西岡の人なり。觀西上人によりて融通法脉を相承しぬ。治承三年七月二日、六十才にして入寂せり。

六世讓阿良鎭上人　山城國嵯峨の人、尊永上人の弟子なり。始めて本宗の緣起を開板せり。嵯峨に三寶寺を創造し、後移りて茲に居る。清涼寺の大念佛は、けだし、此の時より始まりしものならんか。傳にいふ、上人以後、嗣法の資なきを嘆き、八幡社内に、融通印符、其の他の寶物を納め、遠く時の至るを待てりきと。壽

永元年十月五日、三十五才にして世を早うしぬ。是より後、相承の中絶すること凡そ百四十年なり。

思ふに、本宗の、僅に六世を經過して茲に至りし因由は、一二にして止らざるべし。今、其の主要と見るべきものを列せんに

一、前にも述べたりしが如く、むねゝしき所著說論によりて、本宗の敎相をかまへ、敎旨を唱導することは、直授をより所とする本宗々義の、全く要とせざりし所、且つ、開祖みづからも、亦、物の數とする所にあらざりきといへども、これ、やがて、みづから彌陀を感得せるにあらざる後代の所依根底に、不確を與ふる主要の原因となりしなり。更に言へば、口授傳誦は、到底、有形的敎權の如くに重要視せられず、又、制肘力を有すること能はざるを以ての故に、開祖入寂して己に五十年、言耳に消え、影目に遮らざる平凡人士の間には、次第に沈滯するに至ること、理の自然にして、今更あやしむに足らざる所なり。これ本宗の、爾後振ふを得ざるに至りし一原因に外ならず。

一、成文を要せずして、唯た日課勤進の布敎的一面に傾きたりし結果は、布敎者其の人を得たる間こそ、優勝なる功蹟を收め得たれ、學解の奬勵を蒙らざりし門下の時に及びては、頓に其の進路に蹉跌を見るに至らんこと、免れ難きの勢たるなり。實際良忍上人は、學解の方面に於いて、半生の時と精力とを、顯密圓頓の經典に費し、かくて智の階程を極むるに及んで、始めて哲學的考察に、訣別をなしたるの人なりき。何ぞ、始より、その窮尋を經ずして、僅に如來直授の一偈を唱したるに過ぎざるものと同じからんや。單に、之を、布敎者の資格につきて見るも、其の間、多大の徑庭を存すべきは、元より其の所なり。畧言すれば、開祖の宗体のおのづから招ける所、二世以下に、其の後を繼承するにたへたる學殖の天才なかりき。此の、信學を併せて、之れを奬勵せざりしといふこと、また恐らくは、本宗の衰頽を招くに至りし一原因にあらずとせず。

一、以上の二者よりも、更に、有力なる關係を有するものあり。開祖入寂以後四十年、法然上人の他力淨土宗が、都鄙の間に勃興し、相ついで親鸞上人の淨土新宗の、唱導せらるゝに至りしことすあはちこれなり。吾人は、今、筆を此等に宗の叙述に精しくする暇を有せず。只、其の念佛の、奈良朝以後寫宗より半獨立に進み、半獨立より全獨立に發達したるものなることを言へば足れり。換言すれば、自力が、中頃半自力半他力の姿となりたるも、茲に法然親鸞に至りて、純他力の本願往生となり、其の体制を成就して、確立するに至りしなり。此等の二宗は、實に、この發達の針路に於ひて、最頂最易の完備せる宗体を得たりしものなり。一世をあげて之に歸向せしむるに至りしもの、決して所以なきにあらずとすあす。

けだし自然の社會的陶汰法に、珍奇の現象あり。オースタラリアのカンガルーは其のはじめ、吾人の大陸にも產したりし動物なるに、生存競爭の結果、次第にその繁殖區域をせばめられ、今より幾千年以前に於いて、全く其の跡を絕ちしものなりといふ。これ、その形体が、鳥類よりも、一段の進化をあし、正に、一部獸類の屬に入るを得しといへども、尙、純然たる四足の本領を發揮すること能はざるものなる故に、獸類は、進步せる一團として、適者生存の勢力を恣にし、鳥類は、亦、未發達の一團として、鳥類自身に生存競爭をなし、其の特色を發揮せる間に、その過渡中間の狀態に存するカンガルー種は、獸類社會の激甚なる競爭に敗をとり、自然陶汰の不幸にあひて、遂に絕滅するの止むを得ざるに至りしものとなす。而して、今、尙、オースタラリアにのみ見るを得るは、南太洋遠く孤立して、生存競爭の行はるゝこと、大陸地の如く激しからざるを以つての故なり。

吾人は、この法則を以つて、直ちに、宗義の消息を解釋するの、極めて突飛なりとの謗を免れ得ざるべしといへども。尙、社會自然の法則は、吾人の、妄に否定し能はざる所、かつ、純自力の宗義は、自力の本領を發揮して、優に自己の保護

をなし居る間に、純他力の宗義が、亦、此の如き隆盛なる狀態を示すを見ては、更に、其の間に、觀過すべからざる、類似の点あることを思はざるを得ざるあり。況んや、法然上人の淨土宗開立は、あたかも、良鎭上人の入寂に先立つ八年にして、其の主張は、新進の勢を以つて、いよ〳〵一世の歸向を得るに至りし當時なりしに於いてをや。

要るすに、本宗が、他力の進路に於いて、法然親鸞の諸師に超過せられたりしことは、鎌倉以後、ほゞんゞ其の相承さへ明あらざるまでに衰へし、最大の原因たらずとせんや。宗義に於ける或る意味の超過てふことは、淨土宗及び淨土新宗の隆盛期に際して、本宗の敎判者が、少なからず附會の說をなし、淨土宗一派の所說を裝ひて、自宗の楯據となさんとするありしを見ても證するに足るべし。但し、吾人の以上の意を以つて、他力必ずしも自力の敎義に優ると斷ずるものとはなすべからず。

八　法明上人の中興

六世良鎭上人以後、其の相承全く知るべからず。之を本宗の暗黑時代となす。後宇多、伏見、後伏見、後二條の頃、十萬上人あり。前代のすたれたる跡を追うて法金剛院に融通念佛會を建て、大齋を設けて生母の爲に廻向發願せりと傳へらる、これ、やがて、第七世法明上人が、本宗を中興すきべき前驅をあしたるものあり。

法明上人、は河內國深江の人、幼名を信貴千代、長じて道張といふ。父は淸原守道、母は同國平岡の神司の女なり。初、家をつぎ、夫人を迎へて一子をあげたり

しが、永仁正安の頃、疾病大に流行し、夫人母子俱にはかなく此の世を去るに至りしかば、上人、茲に於いて、深く塵世の頼むべからざるを嘆じ、家を弟正次に譲り、後事を家臣に托して遂に家を出づ。時已に年二十五才なり。之より、高野山に上りて、千手院谷眞福院の俊賢法印に投じ、晩進といへども、熱意出離の道を求めんと誓ひ、法印につきて薙髪し、名を法明坊良尊といふ。密教を修し、灌頂をうけて、大に其の奥を極め、又去つて台山に學ぶ。されど、顯密諸家の教行も、凡夫出離の要路には、西方往生の一行にしくなきことを信解しければ、これより、理趣を尋ぬるに急なるを廢して、もつぱら念佛三昧に意を決せられきといふ。其の、特に、融通念佛宗の興隆を以つて、已が任とせらるゝに至りしは、或は歴史的の、如何ある關係をか有せられしによるなるべしといへども、いまだ史實の徴すべきものに接せず。両祖師繪史傳に曰く

不思議や、元亨元年辛酉御年四十三才の冬、十一月十五日の夜のことなるに、

（中略）やはた八幡大菩薩、社務神人地下人等の夢に、融通大念佛の靈寶、悉く社内に在、急ぎ取出し、深江の法明上人に渡し申せとの御告あり。明旦に至つて、如此と云へば、諸人も是に同なりといふ。さては不思議の仔細なりとて、御殿を開き、見給へば、御夢想に違はず、彼靈寶一々に在之。即、神勅にまかせ、御寶物取もちて、法明上人へと交野をさしてくだり給ふ。又上人へも、夢に、靈寶を安置し、良忍上人の位を亞、融通大念佛宗を再興し給へとの御告有。

この靈寶とは、すなはち、良鎮上人の奉献せりと信ぜられたるものなるべし。されど、其の所傳、實に、如何なる消息を傳ふるものなるかは、吾人の察知し能はざる所に屬す　唯、上人が、此の頃より、奮起挺身、本宗中興の爲に、盡瘁せらるゝに至りしは、事實として信ずべし。すなはち、平野修樂寺の舊跡を復興し、佛殿方丈を經營して、道俗勸進の本據とし、又、深江の法明寺、古野の極樂寺、丹南の

來迎寺、八尾の良明寺等を前後に建設し、漸次一宗の基礎を確定せんとするの着手を始め、時の名匠を催して、大緣起の繪卷物を刊行し、之を全國六十六州に分布せんとするの大業を企て、當麻會を創し、來迎會を結びて、至尊以下の入會ともなる等、その事業日に新なること、以前暗黑の時代とは比すべくもあらず。時あたかも南北朝の戰亂に際し、天下騷然、宗敎百年の計を顧みるの暇に乏しく、かつ、禪宗が、偉大の勢を以つて、一代を風靡せる間にありて、尙、前代の衰を興し、敎會の根底を秩序立つることに、多大の奏功を見るを得しもの、上人の英俊によるにあらずしては、遂に能ふべからざる所なり。言ふを得べくんば、本宗が、宗派的形体を具ふるの第一歩は、初めて、此の時に、基せられたるものとなすべし。中興の祖と仰ぐもの、決して所以なきにあらざるあり。

かくて上人は、禪一宗の如き、社會の表面に顯示さるべき光彩美觀を有せざるが中に、近畿民庶の間に、三十年の化益を終り、貞和五年六月十三日、齡七十一にして平野大念佛寺に入寂せり。惜びべし、一度暗燈を明にせし本宗の前途は、上人を失ひて、又、赫々の光を恣にすること能はざるに至れり。唯、己に、上人によりて、敎會的基礎が、ほとんど設定せられたるの後にありたれば、同じく振はずといふが内にも、そが形式に隨伴して、多少の活動をなし、相承跡を絕すといふか如きことはあらざりしのみ、天下の人心を搖動すべき、宗敎的波瀾の如きは、殆、本宗の關知せざりし所なれば、今各代の細事を覗ふの煩をさけ、次に、其の相承の順序をのみ列記すべし。

九　中興以後の繼承

修觀興善上人　乘空法阿上人　心觀道善上人
融阿道圓上人　稱觀幸阿上人　法空本阿上人
良懋道音上人　惠觀淨善上人　圓忍明敎上人
敎觀法圓上人　覺法性阿上人　故觀妙阿上人
良眞道從上人　觀阿道永上人　任空道法上人
良融道通上人　法觀淨蓮上人　道祐幸觀上人

道觀妙惠上人　空觀法淸上人　觀山道由上人
加空法融上人　助空道阿上人　良阿道觀上人
良勝道祐上人　道融良齋上人　頓空宗圓上人
法禪良古上人　良說道和上人　良宜法順上人
良圓法覺上人　良嚴法善上人　良覺道祐上人
良月淸雲上人　良寶崇嚴上人　良惠舜空上人
隆朋崇觀上人　覺意良觀上人

十　大通上人の再興

室町、戰國、及び德川期の初まで、ほとんど波瀾なき平流を流れ來りし本宗は、第四十六世に至りて、再興大通上人の出世にあひ、開祖良忍上人、中祖法明上人と並びて、史上に一紀元を劃すべき大人物を得たり。これ、決して、時ならぬ華にはあらざりき。今少しく上人出世の時代を覗はざるべからず。

元和偃武以來、德川氏專ら文敎の隆盛に力を用ゐ、儒に於いては惺窩羅山を採用して、學事の樞機に當らしめ、古書を探り、廢れたるを興し、子弟を敎授して、

宛然聖道の華を得んことにつとめたりしかば、寛永、正保、明暦をへて、寛文、元祿の頃に及びては、林、山崎の程朱學、伊藤仁齊の復古學、荻生、太宰等の古文辞學、木下門下の碩學等の、勃然として盛なるに至りしのみならず、國學には光圀、契沖、春滿、眞淵等相次いで起り、文藝には貞德、芭蕉、西鶴、近松出で、而して宗教界には、將軍綱吉母子の崇佛尊神の奬勵的態度に伴ひて、天台の妙立、花嚴の鳳潭、黄蘗の木庵、鉄眼等を始として、一時に群雄の續出し來れる時となれり。これ、前代文教奬勵の原因が、百年の後にそが功果をあらはしたるものに外ならず。我が大通上人は、實に、此の如きの時期に際して出興せるなり。

大通尊者、諱は融觀、別に忍光と號す。攝州住吉郡平野鄕の人なり。俗姓は德田氏、慶安二年正月八日に生る。長じて聰達、夙に捨世の志ありきといへども、いまだ剃髮の機を得るに至らず。年三十、住吉の地藏院快圓和尙につきて菩薩優婆塞戒を受け、次いで密雲律師に從ひて梵網戒經を習學し、覺彥阿闍梨に法華經を

うけ、また、叡山の妙立和尙の許に於いて、台家の典籍を學び、鉄眼禪師に謁して正法眼藏を開き、既にして、豫州宇和島に賢巖禪師に從うて首楞嚴經を研究す。あくる年、又、支那の高僧黄蘗高泉禪師に參禪し、練行九旬、禪師をして荷法の大居士たることを贊せしめたりといふ。身、一ヶの優婆塞、しかも、其の學究の博くして勇猛なる此の如し。蓋、他日に於いて用うべき蘊蓄は、多く此の間に於いてなされたるものか。

かくて、天和元年、機漸く茲に熟し、三十三才を以つて、本山第四十五世良觀上人に投じて、剃髮得度す。翌年、又、快圓和尙に參じて出家の菩薩大戒を具足し、兼ねて、與正菩薩瑜伽自誓三聚の宗要を諮決せり。尊者、觀師の門に入りしより、師を輔けて大に宗門の復興を謀る。當時は、法明上人の中興を去る、將に四十世に及ばんとせるを以つて、宗規壞亂、百弊從つて生じ、本末の門流、其の名僅に存すれども、其の實全く廢し、宗門の衰ふる眞に甚だしきものあり。かつ、古來

盧山衣台衣の服制に格執を生じ、其の爭やむ時なかりしかば、天和二年、みづから江戸に上りて將軍に謁し、其の裁可を請うて從來の異諍を和融し、これが濫弊を矯正したり。思ふに、これ、尊者が、衰頽の宗門を再興するには、到底世間的勢力を利用するの、最も捷徑なる事をさとり、これが慣用手段の第一歩となせしものなるへし。

此の年十一月、十万上人融通念佛の秘訣を、泉涌寺天圭長老にうけ、又、善慧上人運宗念佛の奥旨を、深草山の龍空上人にうく。之より笈を負ひて、廣く諸國を巡歴し、高德をたづね、有縁を度す。

貞享元年、再び本山に歸り、師と商議して宗門復興の策を立て、江戸に上りて幕府に請ふ。而してその事いまだ、完からざるに、良觀上人の遷化にあひ、事しばらくはゝみたりといへども、尊者の熱誠や遂に空しからず、元祿元年七月十八日、將軍の裁可により、宗門復興の台命を受くるを得たり。

元祿二年六月、尊者選に當りて本山に晋參す。之より更に意を宗門異俗の興隆に用ゐ、僧衆の制服を正し、寺門に禁牌を建て、三時六齊勸行の制規を定め、格式を設け、風紀を復し、又大に殿宇の輪奐を修め、一山法儀の要具を完備す。本宗は、是に再び其の形体を整へ、他宗の間に介在して、面目を保つを得るに至りしなり。尊者の扶力、眞に大なりといはざるべからず。

元祿三年、請に應して近畿千個の末寺を巡敎し、春秋時正の天王寺踊躍念佛勸喜會を盛にし、西門の短聲堂に念佛を弘通し、又、菩薩來迎會の棟供養をも盛大ならしめたり。

元祿七年五月、綸旨を以つて尊者に紫衣を賜ふ。仝九年、又、擅林勅許の綸旨を賜ひ、學頭院を建て、寮舍を造立して、ひろく學侶を集む。檀林之より日を追うて繁榮し、宗門隨つて光輝を放つに至れり。

元祿十五年、京北野天神の側に圓滿寺を創立し、貴賤を勸めて名帳に入らしめし

に、仝年十一月十日、太上天皇名帳に親序を賜ふ。これ、鳥羽天皇の開祖に賜はりし名帳序にあらひたまへるものなり。

萎微として、いよ〳〵衰頽の運命に向ひたりし融通大念佛宗は、今や健忍不拔なる融觀上人の才發によりて、此の如きの再興を見るに至りぬ。宗教的天才の、元より開祖が出世間的なるには比すべからずとするも、一宗の史上に於いては、優に良忍法明と併稱して、三祖と賛せんこと、決して溢美の業にはあらざるべし。而して吾人は、一宗の私に於いて、其の興隆に多大の功蹟を有せることを價値するのみに止らず、宗教史、宗教學史の公に於いても、上人が文學的事業を吾人に遺したりしことの、重要なるを稱揚せんと欲するものなり。蓋、八百年の長歴史を有する本宗が、此の如くに吾人の研究に備へ得らるゝ所以のものは、仝く、上人の賜なるを以つての故のみ。次章少しく之を述ぶべし。

十一　上人の著作并に入寂

上人の出世が、群英の蜂起すべき時期に際せしことは、已に前に述べたる所の如し。而して、前代の衰をうけたる矇昧の社會的各面が、儒學に、國學に、文學に、宗教に、今や啓蒙の光を要求すべき勢なりしが故に、各面の學者、競うて過去の理想及び事業を研究し、種々の形式に於いて、之が註釋批判をなし、性質特相を發揮せん事に力を用ゐたりき。言ふまでもなく、大通上人の教相判釋事業は、仝く此等の時代精神に鑑み、出世間的事業に、そが應用をなしたるものなりしなり。

從來本宗は、彌陀直傳、日課勤進といふことに重きをおき、その傳說形式を、緣起繪詞にて信念に訴ふることは、早くより行はれ居りしといへども、彌陀直傳の內容を解剖して、之を哲理的講究の對象とすることは勉められざりき。これ、本宗の敎義が、釋尊一代の聖敎に、如何なる關係を有し、如何なる位置を占ひべきかの敎相判釋が、成文としていまだ公にせられざりし所以なり。博學廣涉、一宗の興復を以つて任とせる大通上人、何ぞ、これが欠を補ひ、宗派としての面目を立するに心せられざらんや。然も、社會の風潮悉く、祖述、註解、及び批判の事業に向ふの時にあるに於いてをや。

元祿十六年、上人五十五才にして、『融通圓門章』一卷を撰述し、大方に印布して、本宗の首尾本領を明にせらる。これ、即ち、本宗に、此の類の書ある始めとす。全章凡て十條、就中、第一敎興本緣、第二多門勸喩、第三略釋宗名の如きは、從來所傳の繪詞によるに過ぎざるものなれども、第四法門分齊は、全く上人の學理的見地より與へたる、特有の敎判法にして、第九明佛身と共に、名は他力といふも、然も、見解の華嚴宗に似て、少しく異ることを示すものなり。すなはち、本宗は、他の大乘諸敎と等しく、大乘の極致を以つて圓敎とし、多く華嚴の判敎に從ひつゝ、之に他力の念佛を結合したるものなり。要するに、本宗正依の經典が華嚴法華の二經にして、三部經往生論註は、僅に其の傍依たるに過ぎざるを以つて見ても、本宗成立の消息と、その宗義の位置如何とは、ほゞ推知するに足るべきなり。吾人は敢て、良忍上人を祖とする本宗の敎判に、尊者の獨斷を交へたりや否やを斷ずるに非ずといへども、唯識家が取つて正義となす護法の見解と、天親菩薩當時の賴耶緣起說との關係が、或は尊者と開祖上人との關係に、似るもの無きやを疑はざるを得ず。されど、兎に角に、尊者の、一宗の面目を保持すべき此等の努力は、大に多とせざるべからざるなり。

圓門章の一部、其の細微に關して、精論するの要あるべしとも覺えず。唯、本書

が、教判の最初、かつ、唯一の著作として、爾來一宗依據の中心となり、金辞玉章として、信解行證の教權となりしことを知るを得ば、以つて足るとなすべきのみ、吾人の本宗に關して、多少の學理的講究をなし得るものも、亦、本書が著作の魁をなしたる賜物にあらずとせず。

圓門章撰述に後るゝこと二年、上人又、『融通念佛信解章』二卷を撰す。蓋し、宗要を採釋して、初學を提撕せるものなり、これ、もと、漢文なりしを、今の和漢混交文にあらためたるものか。

上人、一代の化導、上は、王公將相夫人采女より、下、万民に至るまで、日課をうくるもの數を知らず。受法の高足幾數、親化の者百五十人、度緣の僧尼五百二十四人、殿堂坊舍を創建せるもの三十余宇、列祖の石塔を改造せるもの四十五基、その他田園を購ひ、淨財を積み、以つて常住僧物に充つる等、之を列擧せば、與隆の事業、尙、甚多かるべしといへども、今は之を述ぶるを省かんとす。

かくて上人、享保元年春、事を幕府に請うて江戸にあり、たま〳〵微恙を感せしが、みづからその立つべからざることを覺り、くはしく身後の遺誡を記し、如法念佛して遂に寂を示せり。報齡六十八、戒臘三十六なり。

十二　教相註釋の時代

一宗の基礎再び固く、教相の己に確立せられたること以上の如し。然も、徒弟の教育に意を用ゐしにより、幾何もなくして、良山、準海、觀山、隆天、素範、朗湛等の哲氏輩出し、宗風、今や、教相註釋の時期に入れり。今一々に列擧して、之を批判するの煩を避け、法燈の相承を述ぶる傍に、當時主要の述作を介し、又、義脉の異るものをも錄して、以つて、大概をうがゝはんとす。

四十七世融海忍通上人　三條西實教卿の二男にして、大通上人の附弟なり。師一

代の著、檀林清規、本末規約を初め、緣起序文、紀錄、銘詞等、一切を編纂して『大源雜錄』を印行す。天資怜利、器宇衆にすぐるゝものありしも、在職僅に六年にして寂せり。享保六年八月五日、年二十三。

四十八世通存信海僧正　勸修寺前大納言の三男、六才にして入山せり。融天龍海上人、其の後見たり。當時享保十七年、郡山圓融寺の良山師、『圓門章私記』三卷をあらはす。之を敎相註釋の始となす。之についで、河內春日大聖寺の準海師、『圓門章集註』八卷を著す。これ、私記と共に、圓門章に於ける、俱舍の光記寶疏の如きものか。良山、準海の二師は、共に、大通上人に從つて剃髮得度したるの人、各宗義を解して、互に相降らざる所あり。されど、其の文明快、旨意宜しきを得たるもの、恐らくは、まづ、私記を押すべし。以上の二釋に異をたて、大に念佛觀心、口稱即觀念の說を唱道せるものを、宏献師の『融通還源扶敎論』、及び、保瑞師の『融通念佛通妨鈔』となす。扶敎論は、寛保二年十一月、集註に反抗して

いで、通妨鈔は、全三年三月、私記に反抗して著されたるものなり。二者大同小異、對者の文をひきて之を辨駁せり。

此等の異說は、一時大に宗門をさわがしたるものなりしと共に、當時敎相研究の、如何に盛なるものありしかの狀況を報ずるものあり。吾人は、本宗開立、彌陀如來直授の條に於いて、ほゞその眞狀を批判し置きたれば、今改めて兩者の所說を是非せざるべし。學者また偏執の見地を去り、今後の定說を成就して可あり。

以上の數書についてあらはれしものは、『融通本母集』十卷なり。明和八年、郡山圓融寺、觀山師の所著とす。台宗の二百題にならひ、玉章の要文を提取して、その義を釋したるものなり。この頃、また、觀音寺素範師の著に、『融通本緣起綱要抄』八卷あり。年次を詳にせずといへども、筆力遒勁、引證的確、兎に角に本宗の好著といふべし。

安永六年九月十二日、信海、僧正入寂す。年五十六。開祖に諡號を賜ひしは、實

に僧正の在職時にありき。

今序を以つて、本宗に關する述作の目錄を掲くべし。もし宗史或は宗義を研究せんとする人に、何等かの資を與ふる事を得ば、著者の幸これより大なるものなけんなり。但し再興尊者の著作を省く。

圓門章私記	三卷	圓融寺良山師作
圓門草錄	一卷	仝
圓門章集註	八卷	大聖寺準海師作
融通本緣起黃葉抄	一卷 未完	仝
融通如法念佛圖解	一卷	大聖寺隆鳳師作
融通念佛通妨抄	一卷	安樂寺保端師作
融通還源扶敎論	一卷	釋宏猷師作
融通圓門章顯宗論	一卷	仝
融通兩祖師繪史傳	三卷	茶臼山朗湛師作
再興尊者編年略	一卷	仝
融通圓門章講按	未完	仝
融通本母集	十卷	法德寺觀山師作
圓門章論講	四卷	仝
仝　遊意	四卷	仝
仝　私信記	五卷	仝
仝　明眼記	五卷	仝
仝　和解	五卷	仝
融通宗義決擇辨	一卷	法德寺觀山師作
融通圓極名目手鏡	一卷	仝
引接贊口義	一卷	仝

融通本緣起綱要抄	八卷	觀音寺素範師作
大師號私記	一卷	仝
六字名號章	一卷	仝
圓門章再集註	六卷	仝
安心口傳抄	一卷	禪入寺天嶺師作
鐘銘字義	一卷	高林寺壽保尼作
十界一念義	七卷 小本	仝
玉章佛身段分科	一卷	仝
中祖和讃	一卷	大念寺東英師作
融通春鶯辨	六卷	極樂寺鳳山師作
圓門章講述	七卷	西福寺賢敬師作
融通述懷鈔	一卷	清慶寺樂山師作

圓門章大意	一卷	常樂寺詮海律師作
十二尊秘訣抄	一卷	仝
融通課誦補妄抄	一卷	仝
融通妙宗行事要錄	一卷	仝
宗法口訣	一卷	仝
融通念佛大宗記	一卷	仝
融通他力解	一卷	仝
大宗佛事蹟考	一卷	仝
圓念法語	一卷	仝
融通念佛宗意解	一卷	仝
融通念佛驗得傳	二卷	仝
引接贊私記	一卷	仝

聖應大師十德諺註	一卷	仝	
聖應大師行狀和贊	一卷	仝	
融・通念佛安心	一卷	仝	
課誦半齊供義	一卷	金輪寺慈戒師作	
融通大念佛宗綱要	一卷	仝	
引接備妄錄	一卷	仝	
融通密傳義	一卷 又融通傳灯義とも云	洛西千代谷慧日慈光師作（禪家）	
再興上人行實年譜	一卷	仝	
融通骨目	一卷	痴禪窟主作	
融通安心理會章	一卷	作者未詳	
眞俗融通安心章	未完	作者未詳	

十三　繼續時代

大通尊者の再興によりて、宗門大に顯揚せられ、一度敎相の判釋に於ひて、文物粲然の狀見るべきものありきといへども、爾後、種々內外の事情あるにより、宗勢、幾何ならずしてまた平板に歸し、龍海、詮海の依行的律者を除きては、世間的顯家の宗主を仰ぐといふの外、はゞんど注意すべき、宗門、乃至、宗敎的の活動を見ること能はざるに至れり。されど、これ、當時宗敎各派一般の大勢、けだし、止むを得ざりしもの、如し。

四十九世通弘堯海大僧正　前代と仝じく勸修寺家の出なり。寛政十一年二月廿六日入寂せり。在住二十三年、逝年四十五。

五十世通天洞海權僧正　中山家の出なり。文化四年十一月四日入寂せり。在職九年、逝年三十二才。

五十一世通法眞海權僧正　勸修寺家の出なり。天保四年八月四日入寂せり。本山在住二十七年。逝年四十五。

五十二世通律敎彌大僧正　冷泉家の出なり。明治元年官命により大佛妙法院に移りぬ。

五十三世通仁敎寛大僧都　勸修寺家の出なり。明治二年六月十八日、在住僅に二年にして入寂せり。年漸く二十三。敎寛上人の寂後、前住敎彌上人、京より兼務し、明治五年七月仝上人入寂後は、梁松院實聞師、事を視る。仝年九月、華嚴以下五宗廢宗となり、他に附屬せしめらる。本宗實にその一に居れり。

五十四世眞敎慈嶺僧正　三州辟海郡栁尾村の人なり。大樹寺良聞上人に從つて得度す。諸山に經歷し、內外の學に達す。特に敎相に精しく、明治の初年東京大敎院に職す。明治六年一月本山に請せられて宗主となりぬ。明治七年、本宗を獨立にし、十三年十一月廿三日入寂せり。年七十七。

五十五世義雲敎忍大僧正　唐橋在綱卿の男なり。明治十三年三月管長認可、一度免職となりしも、十七年四月再び住に復す。廿九年宗制寺法を改む。三十一年四月、中祖法明上人五百五十回忌を修めしが、同年五月廿三日、過つて火を失し、本堂以下六十七棟を燒く。仝年九月事を以つて職を退く。後任管長撰定に至るまで、梅原靈嚴上人事務を取扱ひ、三十二年八月より、三十四年四月に至りぬ。

五十六世清凉得善大僧正　すなはち當代の管長なり。齡古稀に及び、入つて頹弊の宗門を起さんとす。其の意氣や壯者も尙及ばざるものあり。されど、世は情交砂の如くに淡く、宗敎の頹廢を見る、尙、對岸の火も啻ならざるの時に當り、近

幾三百余の末寺と、少數の檀徒とを率ゐて、燒土とこしへに赤き所、再び、舊寺の殿宇輪奐の古に復せんとするは、これ、決して、容易なる事業にあらず。然も、民庶の心念に不拔の信仰を扶植し、病に應じて藥を與ふるが如く、科學的病毒の苦惱に、精神的大安慰を供ふることに於いてをや。八百年の長歷史を有する本宗は、中興再興によりて、しば〳〵險難を排し來りしも、其の惰力將にこゝにつきんとするの時に當りて、精神的及び外形的の大打擊を蒙りぬ。これ、眞に、一曲の哀劇を以つて見るべきものに非ざらんや。

十四　結論

宗敎の非運、蓋、近時より甚しき者は稀なるべし。殊に、本宗の逆境に於いて、其の更に然るを認むるなり。されど、吾人は、此の大勢の、他の極端を望みつゝ、長〳〵一所に停滯するものなることを信ずる能はず。

請ふ見よ、近世以太利の文藝復興が、中世期の天下の、あまりに宗敎的なるを排して勃興せりきと雖も、其の極めて世間的なる弊風は、幾何ならずして、再び、献身的なる宗敎的運動の爲に排擊せられ、其の醜と陋とを暴露して、后代識者の爲

に、齒するを恥づとせらるゝに至りし事を。彼等は實に絶對を輕侮したりき。彼等は實に箇人を尊重したりき。彼等は徹底して現實を尚べりき。彼等は終極して超實を蔑にせりき。かるが故に、人々、浮世の虛榮を追うて、道義癈頽し、法王自ら其の渦中に投じて、一度は、世上一の之をあやしむものなきの狀をさへ呈したりき。されど、憐むべきこの大勢は、忽ち眞摯なる宗教的機運を反動して、再び無限を談ずるの世風とはならしめたりしなり。

透觀すれば、それ世界史は、無限と有限との衝突歷程のみ。一伏一起、順運頓挫の反影に過ぎず。昨は此端に走りて、今彼端に趣く。方今の狀勢、そもいづれにか比すべきぞや。封建の規縛を脫して、人は自由の境に遊び、泰西の風物を學びて、之を己に新にせんとするの時、もし科學の盛行を、古代希臘文化の追慕に比すべくんば、文藝復興期の世間主義は、殆ど吾人目下の大勢と觀を等しうするものと言はざるべからず。希臘の當時に、神話の側面を重くする事を悟らざりし以

太利は、泰西科學の裏面に、宗教の勢力あるを悟らざる本邦當今の摸倣になづらふべく、利己驕傲、かねて、諂佞なる人道者流を出せる事、亦、現世の營々にうき身をやつす吾人社會の墮落にくらぶべし。然も、吾人目下の社會は、箇人の自覺、及び、その主義の尊重に於いて、尚遠く、文藝復興期の夫に若かざるものあるが如し。ニーチェの主義は、更に唱導せられ、實現せられざるべからず。吾人之に贊すとにはあらざれども、蓋し、天下の大勢は、其の極端に進まざれば、止まざるものなれば、吾人の社會は、或る一部の人には誹謗せられながらも、尚、しばらくは、現時の傾向を、其の極端に追ひ行くなるべし。人心の墮落、社交の腐敗は、從つて其の度を加ふるの止ひを得ざるに至るなるべし。超實の談は殆ど無用の冗辨たるべし。神佛は好適なる文藝の資料たるに過ぎざるべし。換言すれば、宗教は、殆ど實世間の與り知る所にあらざるに至るべし。此の時に當りて微力なる吾人は、泣いて其の行くがまゝを視ざるべからざるべし。

されど、尺蠖の大に屈するは、やがて大に伸びんと欲するが爲に外ならず。天下千年の大勢、また實に、此の如く、他の極端を望みつゝ、長く一所に停滯するものにあらずして、此の極端の反動は、必ず、彼の極端に於いてあらはれざるべからず。一度屈從したる無限は、茲に、有限を排却して、夫が廣大の翼を張らざるべからず。ルーテル一輩の宗教改革を以つて、單に教義の論爭とあすが如きは、全く其の實相を解せざるものゝ言なり。畧言すれば、目下の社會の傾向に反動して、必然的に宗教の勃興あるは、吾人の期して待つ所なり。唯其の時の早と晩と、其の勢力の、小と大とは、あらかじめ吾人の明言し難き所、これ、社會の要求と當局の奮起とによつて定るのみ。方今、社會の狀況を一瞥して、宗教の將來を物語り、理性を云々して、姑息の彫琢を試みんとする輩の如きは、其の愚實に笑ふにたへたるものなり。

いさゝか以つて有識なる諸家の自重を望む。

明治三十六年二月十二日印刷
同　年二月十五日發行

東京市下谷區谷中清水町七番地
著者兼發行者　鈴木暢幸
同　芝區芝增上寺
發行所　佛學院
同　神田區旅籠町二丁目十一番地
印刷者　安藤忠容
同　同所
印刷所　廣業館

不許複製

1-274

82
574

019211-000-5

82-574

融通大念仏宗略史

鈴木　暢幸／著

M36. 2

ABF-2803